

## 緒言

日本という国土に生まれ育ち、日本人として生きる者たちにとって、「日本とはどのような国なのか?」「日本人とはどのような民族なのか?」といった問いが、折にふれて去来する。あるいはそれらが形を変え、「日本とはどのような国であるべきか?」「日本人はいかに在るべきか?」という問いとなって迫り来る場合もある。時代が大きく動くときがそうであろう。

かつて多くの人々が、それぞれの立場から日本をめぐる問いに挑んできた。昭和の敗戦後に「倫理運動」を興し、本叢書の発行元である社団法人倫理研究所を創立した丸山敏雄もその一人であった。

明治維新後の動乱はすでに収束し、近代国家としての国力充実を最優先に驀進していた明治二十五（一八九二）年五月に丸山敏雄は生まれた。歴史の面白さに目覚め、教師の道を志し、修養の気風が横溢する中で、日本を支える若者の教育に挺身した敏雄にとって、理想の教師たることと真の日本人になることは同一の課題であった。その課題を追求するあまり、三十七歳にして改めて大学に籍を置き、日本の古代史や神話を専門的に研究する。さらには宗教の修行研鑽に打ち込んで、指導的立場にも就いた。あるいはまったく予期せぬ被告人の汚名を着せられて、屈辱に耐えながら長くつづく裁判に挑んだりもした（さらに詳しい略歴については第二部第三章をご覧ください）。

この一人の人物を通して、見えてくる日本がある。それを究明することは、丸山敏雄の人と思想の研究のみならず、現代の壊れかけている日本を創生する上でも裨益するところが大きいと信じる。

本書の内容は、筆者がこれまで月刊誌『倫理』および『倫理研究所紀要』に発表してきた論考から採り、一部を補正してまとめたものである。

第一部「國體と神話——丸山敏雄が挑んだもの」では、敏雄にとつての日本が直接のテーマとなる。

神話に由来する日本の國體こそ、敏雄が生涯を賭して追求しつづけた対象だった。そこにはつねに、天皇の存在がある。天皇を崇敬してやまない男が、はからずも天皇（皇室）に対する不敬の罪を負つて奈落の底に突き落とされ、それがために天皇の存在を「倫理の淵源」と認識を深めるようになった過程にいったい何があつたのか。——未完の大著『天皇制の研究』と『奇蹟の研究』を中心に、戦前の國體をめぐる状況を踏まえながら考察する。併せて、日本の神話をはじめとする文化芸術が根ざしている「幽顕」の認識が、丸山敏雄の思想にどのように流れ込んでいるのかを明らかにしたい。

第二部「影響と比較——丸山敏雄をめぐる人たち」では、三名の人物を採り上げる。

丸山敏雄の思想形成に多大な影響を与え、敏雄をして「学問の旧師」と敬慕せしめたのが倫理学者の西晋一郎であつた。敏雄が唱導した純粹倫理という大樹を支える一本の太い根として、西の独特な倫理学・哲学が間違いなく存する。戦後に敏雄が倫理運動を興して純粹倫理を訴える中で、引き合ひに出されたのが哲学者であり教育者の天野貞祐であつた。二人が出会うことはなかったが、両者とも戦後の混乱期に「道德の再建」を掲げて獅子吼し、日本創生のために尽力した。そしてもう一人の湯浅真生は、「ひとのみち」教団時代の丸山敏雄の同輩であり、弾圧事件によつて共に苦しみ、長い裁判を闘う同士となつた。人生の歩み方も

性格もおよそ異なる二人を比較することで、丸山敏雄の人物像が鮮度を増してくる。以上の三者もまた、日本あるいは日本人の在り方を真摯に追求しつづけた人たちであった。

かつて丸山竹秋は『丸山敏雄 人と思想』（一九八二）のあとがきに、「筆者の『丸山敏雄の思想研究』としては、第一冊目の『倫理と宗教』、第二冊目の『万人幸福の栞・解説』につづく、第三冊目の著作にあたるものである」と書いている。その後に出た『丸山敏雄の靈魂観』は、第一冊目の続篇であるという。そうした言い方に倣えば、本書は筆者の丸山敏雄の思想研究としては、第一冊目の『純粹倫理と科学』（本叢書一）につづく第二冊目となる。

丸山敏雄の生誕百二十年目となる今年の端午の節句を前に、本書を刊行できることを大きな喜びとしたい。

平成二十四年五月五日（丸山敏雄の生誕二二〇年目の日）

著者

〔補記〕

- 本書の本文や注の中に「全集」とあるのは、『丸山敏雄全集』（倫理研究所発行）を指す。
- 「注」は各章の末尾に入れる。「注」に示す引用文の出典は、最初の頁数のみを記す。
- 本書では「國體」の用語を旧漢字で表記し、引用文で使われている旧漢字は「國體」以外は現代表記に改める。かな遣いについては原典のままとする。

## 目次

# 目次

## 緒言

## 第一部 國體と神話——丸山敏雄が挑んだもの

### 序説 丸山敏雄と『天皇制の研究』

1. 第一部のねらい／2. 『天皇制の研究』について

### 第一章 日本の國體思想概観

#### 第一節 國民道德の形成と展開

1. 教育勅語——示された國民道德の大綱
2. 戊申詔書——轉換期における國民道德の振興
3. 家長としての天皇

#### 第二節 神話批判と皇室擁護——津田左右吉と丸山敏雄——

1. 述べて作らず／2. 津田左右吉の皇室擁護論

#### 第三節 國體思想をめぐる対立と相克

1. 國體思想の形成と対立／2. 個別主義に立つ國體論

#### 第四節 西晋一郎の國體論

1. 國民の信念としての國體／2. 「二君万民」の倫理

第二章 丸山敏雄の國體觀

第一節 奇蹟はどうして起るのか……………77

1. 奇蹟解明への曙光／2. 「ひとのみち」との出会い

第二節 神と人との交感……………89

1. 神示の研究／2. 神示の本質／3. 神話と向き合う態度

第三節 奇蹟の発現と呪的思考……………102

1. 奇蹟のさらなる研究／2. 古代人の呪力

第四節 神話と歴史の見方……………114

1. 天皇批判の嵐の中で／2. 神話と歴史の関係

第五節 象徴および中心としての天皇……………127

1. 國體明徴の時代の中で／2. 象徴としての天皇  
3. 中心としての天皇

第六節 天皇制と個人主義……………140

1. 個人主義に対する戦前の政府見解／2. 丸山敏雄の個人主義批判

第七節 奇蹟から倫理へ……………152

1. 天皇制は倫理の中にあり／2. 奇蹟から倫理へ

第三章 丸山敏雄の幽顕観——「出入幽顕」の語をめぐる——

第一節 「全一統体」と幽顕……………169

1. 「全一統体」の「スモロジ」／2. 人生神劇と死生一如
3. 記紀神話における顕界と幽界

第二節 「物境不離」と幽顕……………182

1. 「物境不離」から人間の使命へ／2. 「物境不離」から「出入幽顕」へ

第三節 敬神と神人交感——「出入幽顕」の実践論……………189

1. 性神と敬神／2. 「神示」による神と人の交感

第四節 「出入幽顕」と日本の思想・文化……………200

1. 神話的「スモロジ」とモラル／2. 鈴木重雄の「幽顕哲学」
3. 詩歌と幽顕の芸術論

第二部 影響と比較——丸山敏雄をめぐる人たち

第一章 丸山敏雄と西晋一郎……………

第一節 西倫理学の師承相伝……………216 214

1. 西倫理学の全体的特色／2. 西晋一郎の基本的立場
3. 北条時敬と西晋一郎



第二節	「孝」の哲理と「復帰」の原理	229
1.	倫理の淵源としての「孝」／2. 「復帰」という原理	
3.	丸山敏雄に与えた影響	
第三節	「即」の原理と実践の意義	241
1.	「孝」から「恩」へ／2. 「即」の原理——特殊と普遍の関係	
3.	実践実行の意義	
第四節	西晋一郎における道徳と教育	253
1.	道徳と教育／2. 個性教育と無私の倫理	
第二章	丸山敏雄と天野貞祐——「道徳の再建」をめぐる	267
第一節	天野貞祐の人物と業績	269
第二節	道徳の感覚に根ざした道徳論	275
1.	道徳への信念／2. 道徳の易不易と道徳教育	
第三節	旧道徳と純粹倫理——丸山敏雄の道徳論	284
第四節	道徳と幸福は一致するか	291
第三章	丸山敏雄と湯浅真生——「ひとのみち」入信の動機と過程の比較考察	296
第一節	宗教との出会いに至るまで	300
1.	丸山敏雄の前半生／2. 湯浅真生の前半生	

第二節	教団との出会いと印象……………	309
	1. 勇躍する丸山敏雄／？ 疑念に惑う湯浅真生	
第三節	「教師」から准祖への道のり……………	327
	1. 丸山敏雄の覚悟と回心／？ 湯浅真生の覚悟と回心	
第四節	まとめと考察……………	336